

第4章 千光寺跡とキリシタン墓碑

第1節 千光寺跡と田原城主

1. 田原城跡と田原氏

田原城は、四條畷市上田原の八ノ坪に所在し、生駒山系から東へ派生する標高 178.6mの尾根上に所在する。本郭は 南北約 26m・東西約7mの削平地で、周囲との比高差は約 30m高くなっている。城の北東側に清滝街道が、北側に古堤街道が通じる河内と大和を結ぶ要衝の地に築かれており、飯盛城の東側である大和方面からの攻撃を防御する支城としての役割を奈良県生駒市の北田原城とともに担っていたと考えている(實盛 2013)。この田原城のある八ノ坪には城郭に関する地名「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」などが残っている。城の本郭には、廃城後に磐船神社(交野市)から分祀された住吉神社が建立されていた。本郭の南西には深い堀切があり、本郭と二郭とを区切っている。この堀切は、北西に延びて深い堀切道となり、井戸郭に出る。井戸郭は窪地となり、二カ所の井戸と土塁にせき止められた貯水池の跡がみられる。西方には生駒山系から延びる尾根上に曲輪が築かれている。南部の谷間は現在宅地となっているが段地形が残っており、居館等の存在を思わせる。城跡の北と東側には北谷川、南側には天野川が巡っており、堀の役目を果たしていると考えている。また北西の尾根の両側には深さ7mのV字形の空堀を発掘調査で確認している。城跡の南西部にある「殿様屋敷」伝承地の調査では、掘立柱建物跡や石組井戸を確認し、城に付随する居館の存在を確認した。これまでの調査から築城年代は 14世紀中葉とみられ、その後 16世紀後半まで城として機能したとみられる(野島 1986)。

この田原城の城主は田原対馬守と伝えられ、口伝の他に天保年間の文献に「この地に永禄年間の当地守護田原対馬守の城跡があったと伝える」とあるのと、「文禄年間に田原城主の娘が岡山地区の領主に嫁いだ」とする文献が存在する(山口編 1972)。現在の禅宗月泉寺は、城主たちの菩提寺であった真言宗千光寺の後身である。田原城は、現在の場所に築かれる以前の鎌倉時代(13世紀代)には約1 km北東の正傳寺西側の小字「古城」の地(森福寺跡と同位置)にあったと伝えられており、田原氏もそこに居住していたと考えている。また、田原城跡の北方に所在する千光寺跡の墓地の発掘調査で確認した最も古い墓(3号墓)の年代とも一致する。しかし「古城」の地は現在も未調査のため詳細は不明である。

2. 千光寺跡について

千光寺跡は四條畷市大字上田原に所在し、平成6年度の調査により新たに発見した遺跡である。その調査地には、田原城主田原対馬守の墓と伝えられてきた五輪塔など数基が雑木林の中に存在しており、寺の存在を伺わせる「寺口」という小字名が残っていた。

調査の結果、寺跡とそれに付随する墓地を確認した。墓地では、3号墓(13世紀代)をはじめ、25基以上の五輪塔群と常滑焼大甕を埋納した総供養塔と考える6号墓(12世紀末~13世紀前葉)などを確認した。3号墓については、重厚な埋葬形態や、墓の東側一部が崩落した斜面下から本来3号墓の副葬品として埋納されていたと考えられる龍泉窯製青磁袴腰香炉(大阪府指定有形文化財)が出土していることから、田原城主の墓と考えている。

また寺跡においては、東西に伸びる長さ 15.5m・幅 1.2mの平行に築かれた2列の花崗岩の石列を確認した。この石列の土層断面を観察したところ、2個の石の間に粘土と砂利を混ぜた土を版築工法で積み上げている土壁の痕跡を確認したことから、土塀の基礎であることが判明した。

千光寺跡からは、天目茶碗などの陶磁器類や茶臼、青銅製懸仏、大量の瓦など多くの遺物が出土しており、4点の平瓦には『千光寺』や『千』と刻印されていた。

また、『明治六年酉二月 廃寺取調書』に千光寺についての記載があることがわかり(本書 62頁)、文献上からも千光寺の存在が明らかとなった。

以上、遺跡の内容や伝田原対馬守五輪塔が存在していたことから、千光寺跡は田原城主の菩提寺とそれに関連する墓地であると考えている。

3. 千光寺跡の構造について（第32図）

千光寺跡は、生駒山系から派生する尾根上に造成された墓地と寺跡である。南側の谷を挟んだ箇所に田原城跡が所在する。

千光寺の敷地の北側には寺、南側には墓地が所在する配置であった。敷地の南端には東西方向に東から西へ緩やかに上っていく参道があり、その南側は南へ向かって下る谷地形となっている。参道の北沿いには花崗岩の石列を基礎にした土壙が続いている。3次にわたる調査で延長28.2mを確認した。発掘調査では土壙の南側から大量の瓦が出土していることから、土壙には瓦が葺かれていたと考える。

東から緩やかに上る参道を西へ向かって歩んでいくと土壙の石列が途切れる箇所に当たり、その場所が寺へ向かうための出入口である。この出入口の通路の下部には、花崗岩を並べた排水溝が作られており、排水溝の上には横長の花崗岩を蓋として敷並べて路面としていた。通路を北へ進むと東へ傾斜するやや深い溝（落込みA）に至る。この溝は東へ大きく広がった形状をしており、発掘調査時には溝の西端の北斜面から若干の湧水を確認したことから、大きく広がった個所は溝から水が流れ込む池（落込みB）と考える。

溝（落込みA）の北側には西へ緩やかに上る尾根状の斜面があり、そこに南北方向の溝（溝3）がある。この斜面を上りきると後述する寺域の西側上段に至ることから、この溝（溝3）は寺域の境界を示すものと考える。またこの斜面自体が墓地との境界でもあると考える。

溝（落込みA）を渡って北へ向かうと寺域に至る。発掘調査の対象範囲は寺域全体ではなく、北側と東側へ広がっている。寺域の西側は急な斜面地形となっており、その上段では不整形な溝を2か所で確認した。特に北西端の溝（溝4）では発掘調査時に若干の湧水がみられた。この溝の斜面下に位置する土坑（土坑100）には、瓦質土器大甕が設置されていたことから水溜施設の可能性を考える。

この寺跡からは多くの遺構を検出したが、明確な建物を復元することはできなかった。

参道沿いの土壙は出入口の西側付近で無くなる。出入口から西へ向かい花崗岩の自然石を並べた簡易な段を一段上がってさらに進むと、花崗岩の自然石をL字状に組んだ場所に至り、参道の終わりを示していた。ここを上がると墓地に至る。

なおこのL字状の石積みの一角には、その一部を利用した区画があり、五輪塔（35号墓）が設置されていた。この五輪塔の地輪には、寛永十年の年号が刻まれていることから、その時期以前に埋まつたL字状の石積みの一部を利用して新たに墓地の区画を作り五輪塔が設置されたことが判明した。

墓地は大きく斜面上と平地部に分かれる。特に斜面上に築かれた3号墓は、下から見上げるような場所に位置していた。平地部には多くの五輪塔が設置されており、中央近くには2段の基壇を設けた墓があった（6号墓）。

参道を東へ下っていくと、千光寺が所在する尾根の先端部に至る。その部分については現在も雑木林として残っている。

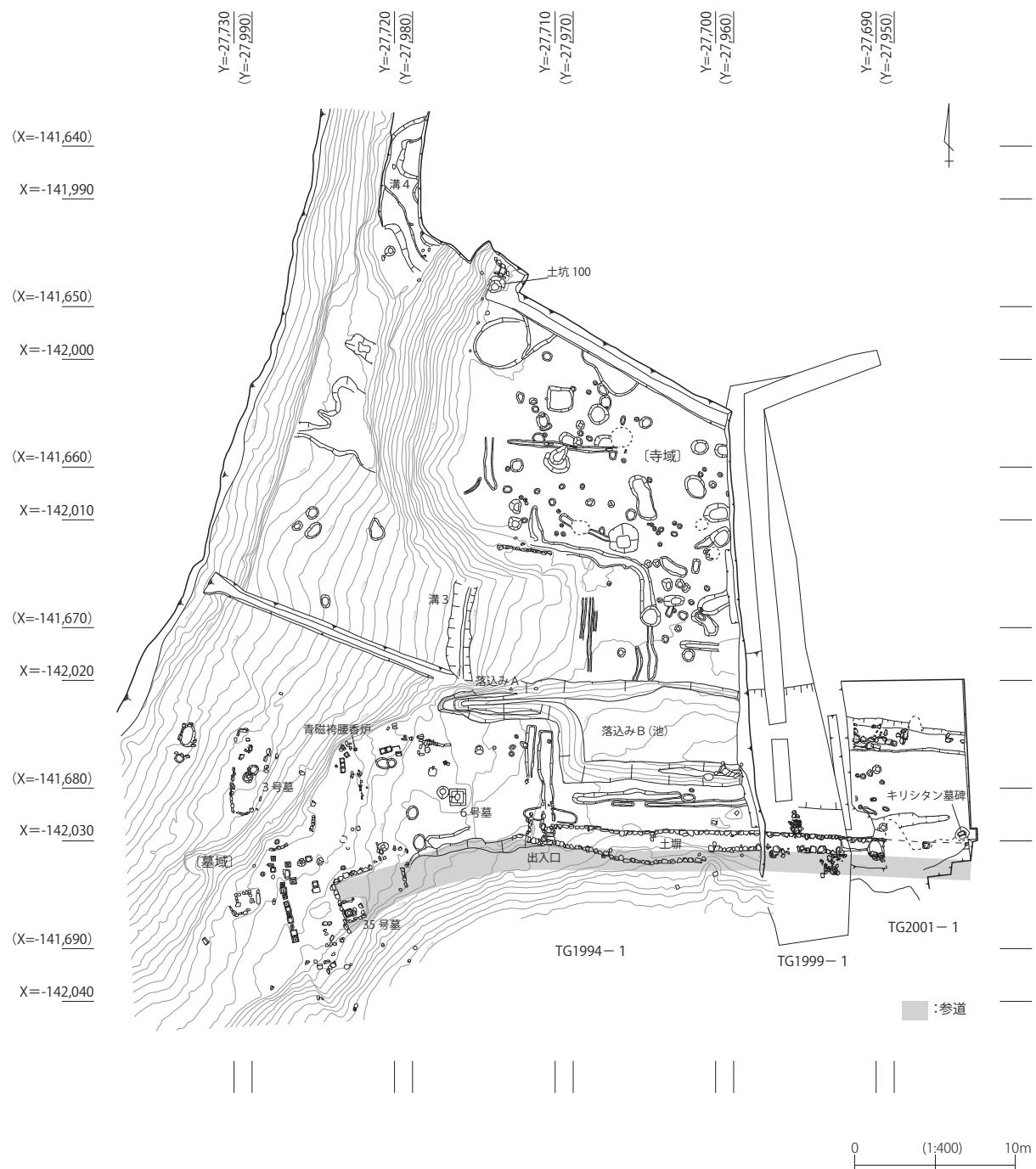
4. 遺跡の重要性について

（1）国人領主層の墓制

中世の墓地については、国人領主層のものと考えられている大内城跡墳墓（財団法人京都府文化財調査研究センター 1984）、惣墓である一の谷の中世墳墓群（13～17世紀、磐田市教育委員会 1988など）、大王山遺跡（中世墓、奈良県立橿原考古学研究所編 1977）、古市城（14～16世紀の城・墓、奈良市教育委員会 1981）や岡本山古墓群など多くみられるが、国人領主層の墓地については資料が少なく不明な点が多い。そのなかで田原氏という国人領主に関連する墓地とそれに伴う寺跡が発見されたことは重要であると考える。

（2）総供養塔について

墓地から出土した6号墓は、その形態から総供養塔と呼ばれているものと考える。総供養塔は、畿内では墓地の中央にある場合が多く、これらはその五輪塔の形態から平安時代末～南北朝時代頃まで



第32図 千光寺跡調査地区合成図 ()は世界測地系

のものが多いとされている。基本的には個人の供養塔ではなく、墓地に結縁した人々のためのものである。年号銘をもつものも多く、市内逢坂の延元元年（1336）銘の五輪塔もこのような性格のものであると考える。このような墓の下部施設を発掘調査した事例は多くなく、その一つが長野県飯田市の文永寺に存在するものである（飯田市教育委員会 1987）。この総供養塔の五輪塔の下部には、納骨のための常滑焼大甕（12世紀代）が埋められており、また五輪塔を納める石室（覆屋）に弘安6年（1283）の銘文が刻まれていることから、造塔年代のわかる資料として重要文化財に指定されている。この覆屋つまり堂内に五輪塔を配置する構造が、後の納骨堂に受け継がれてゆくと考えられている。これと比較すると6号墓には五輪塔や覆屋は現存しないが、下部に設置された常滑焼大甕（12世紀末～13世紀）が総供養塔という納骨施設であることを確認できたことは成果の一つである。

（3）埋葬方法について

火葬骨を骨壺に納めて埋蔵するもの、石塔の下に直に火葬骨を埋葬するもの、石塔のみを建てたもの、土葬するものというように様々な埋葬方法を国人領主層の墓地においても確認したことは、中世の墓制研究において重要な遺跡であると考える。

3号墓のような石を組んだ墓は、『餓鬼草紙』にみられるように基本的には3段に造っていたが、次第に高さが低くなっていくとともに段も不明確になり、最終的には単なる石の区画になると考えられている。そして石の区画は、南北朝時代の頃から独立したものではなく連接することが多くなり、次に大きな区画を分割して小区画を形成するようになり、さらに小区画もなくなり大きな区画のみになると考えられている。そしてこの区画は家族単位のものと考えられている。

のことから、斜面を平坦に削平して石で区画した3号墓は、1号・2号土坑の副葬品や埋葬形態から田原城主の墓と推測し、両土坑は血縁関係にある墓と考える。

4. 遺跡を移築するにあたって

千光寺跡の発掘調査では、埋葬施設や多くの五輪塔、総供養塔などを確認し、その埋葬方法や出土遺物から田原城主に関連する墓地であると考える。また、墓地の北側では寺跡を発見し、「千光寺」と刻印された瓦が出土したことから、この地が文献にある田原城主の菩提寺である真言宗千光寺跡であることが判明した。

以上、この遺跡が中世の国人領主層の研究をしていく上で重要な遺跡であると考え、現地での埋没保存などを協議したが、開発計画の変更が不可能となつたため、旧住宅・都市整備公団の御理解・御協力で、特に重要と考えられる遺構については近隣に移築し、平成13年12月1日に「千光寺跡移築広場」として広く一般公開するに至った。

第2節 田原城主レイマンのキリスト教墓碑

1. キリスト教墓碑発見の経緯

平成13年度に阪奈サナトリウムが所有する千光寺跡の東側隣接地において、病院の駐車場建設の造成工事に伴う発掘調査で確認した千光寺の土壙の基礎石列の最東端の北側、つまり土壙の内側（寺域内）にあたるところにおいて、一辺約63cm・深さ約21cmの隅丸方形の土坑（その南半分は後世の削平を受けている）を検出し、その中から文字を刻んだ面を上に向けて置いたような状態でキリスト教墓碑が出土した。遺骨や副葬品などは出土しなかった。

2. キリスト教墓碑について

墓碑の形態は将棋の駒に似た五角形をしており、基底部の中央付近に突起があることから、台座に据えつけられていた立牌形であると考える。これはキリスト教の墓碑に特有の寝棺の上に伏せたように設置する伏碑ではなく、日本在来の石塔に系譜があるものであり、仏塔にキリスト教の意匠を表現した和洋折衷的な墓碑である。

墓碑の表面には、上半部の中央にイエズス会の紋章があり、イエス・キリストを表すと考えられている『I H S』の一部と考えられる『H』の文字とその横線の中央に意図不明の『()』、その上部に十

字架が刻まれており、下半部には3列の縦書きで右から順番に『天正九年 辛巳』・『礼幡』・『八月七日』と刻まれている。意図不明の『()』に関しては、キリスト教遺物で『H』の文字の横線中央部にゴルゴダの丘を示しているとされる半円形状の表現がある。このことから半円形の上部は離れているが、同じ表現をしたものと考える。

3. 『礼幡』について

松田毅一氏は『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』のなかで、日本布教長カブラルの1571年から1574年にかけての2度の五畿内巡察については史料の欠如から不明確な点が多いとしている。そのなかで、ルイス・フロイスの未刊書簡のうち重要なものとして次のものをあげている。

- (1) 1574年9月8日付、堺発信、西国、豊後、肥前の同僚宛、フロイス書簡 (Jap. Sin. 71. f. 231 ~ 234V)
(2) 1575年5月4日付、堺発信、カブラル宛、フロイス書簡 (Jap. Sin. 71. f. 255 ~ 258V)

このうち(1)については、以下のようにその一部を紹介している。

「三ヶから一里離れた城の城主 Gonosuqedono (ゴノスケ殿) は未信者ではあったが、イエズス会の大の友人であり、時々教理を聞いて、大分デウスのことが判っていた。一中略—臨終のときになり、彼と共にいた二人のキリスト教徒は、彼が受洗することを熱心に頼み、ロレンソの派遣を乞うた。ロレンソが都から十二里距った所へ着いた時、彼は既に死亡していた。然しその旅行は無駄ではなく、三ヶ殿の一元老 Gennro はキリスト教徒になった。彼は Tauora (田原) の城主で、その改宗は大いにキリスト教徒の喜びとなり、之が為にその家臣がキリスト教徒になることが期待されるに至った。—後略—」

(2)については、フロイス『日本史』松田毅一・川崎桃太訳 中央公論社の第46章の注釈の中で、原書簡は表裏の文字が二重になり解読不能な場所が多いと断った上で以下のようにその一部を紹介している。

「聖週と復活祭は三ヶ（三箇）で盛大に催され、甲賀、若江、田原、堺、および fin . . . (解読不能) のキリスト教徒三百名が集まった。—中略—復活祭の一週間後フロイスは三ヶを出、堺と鳥帽子形のキリスト教徒を訪い、ついで都に至り、オルガンティーノとともに信長から親切に迎えられた。池田丹後守、三ヶマンショ、結城ジョアン、田原レイマン、その他河内のキリスト教徒武士も信長に挨拶に赴いた。—後略—」

以上、(1)の書簡には1574年に田原の城主がキリスト教徒に改宗したこと、(2)の書簡には1575年には田原にキリスト教徒が存在していたこと、また田原レイマンが織田信長に会っていることが記されている。

千光寺跡から出土した墓碑から判断できることは、十字架が刻まれていることからキリスト教徒の墓碑であり、その下半部中央に刻まれている『礼幡』の2文字は、洗礼名を表していることである。また2文字の訓読については、礼は「れい」・幡は「まん」と読めることから、『れいまん』であると考える。そしてこの人物が亡くなった年号『天正九年 辛巳』は、西暦の1581年にあたる。

以上の点からこの墓碑の人物に関しては、以下のことが推測できる。

第1に、この墓碑は、田原城主田原対馬守一族の菩提寺である千光寺境内の南東隅に掘られた土坑から出土していることから、墓碑に刻まれている『礼幡』なる人物は、田原氏の一族の者である可能性が非常に高い。第2に、墓碑に刻まれている『礼幡』については、『レイマン』と読むことができ、前述から『田原レイマン』である。第3に、『田原レイマン』なる人物は、1575年に三好長慶の配下であり、飯盛城の支城の城主である池田丹後守、三ヶマンショ、結城ジョアンといったキリスト教徒と行動を共にしていることから、同様の身分である『田原城主田原レイマン』である。第4に、『礼幡』が亡くなった1581年に近いことから、1574年に改宗した田原城主の何某は、『田原城主田原礼幡』である。

4. 河内のキリスト教徒について

天文18年(1549)にフランシスコ・ザビエルによって日本に伝えられたキリスト教は、その後を引き継いだガスパル・ヴィレラが永禄2年(1559)に入京し広く布教されるようになる。その4年後の永禄6年(1563)に飯盛城主三好長慶が、ヴィレラやロレンソに城下での布教を許可してキリスト教

の保護を命じた。翌年の永禄7年（1564）にヴィレラは、結城左衛門尉（アンタン）の依頼により口レンソを飯盛城に使わして2度にわたりヴィレラから70余人が洗礼を受ける。その主な人物は、三箇城主三箇伯耆守頼照（サンチョ）、若江・八尾城主池田丹後守教正（シメアン）、鳥帽子形城主伊智地文大夫（パウロ）、三木判大夫（パウロ）、庄林コスメがあげられ、この改宗後間もない頃に結城弥平次（ジョルジ）が洗礼を受ける。また同年には砂の寺内（四條畷市砂）や三箇（大東市）に教会が建てられる。その後河内においては順調に布教が進み、天正5年（1577）には砂の教会では信者を収容できなくなり、結城弥平次によって岡山（四條畷市）に畿内で最も莊厳な教会が新たに建てられる。『グスマン東方伝道史』下巻によると、この頃田原にも教会が建てられている。天正9年（1581）には河内のキリストンが最も繁栄した時期である。

このように繁栄した河内のキリストンであったが、天正10年（1582）の本能寺の変で三箇サンチョが明智光秀側に与したため、三箇の聖堂は秀吉の攻撃によって焼かれ、天正11年（1583）には、岡山城主結城ジョアンが秀吉により他国へ移封される。このとき岡山の教会は、高山右近の尽力により取り潰しを免れて大坂城下に移築される。翌天正12年（1584）、結城ジョアンは徳川家康軍との小牧・長久手の戦いで討死する。この頃から河内キリストンの勢力は衰退していくこととなる。

5. キリストン墓碑出土の意義

今回のキリストン墓碑については、前述のとおり田原城主の田原レイマンのものと考えられ、その墓碑に刻まれた天正9年（1581）はまさに河内キリストンの最盛期であったことがわかる。おそらく田原レイマンが死去した際には千光寺の墓地内に埋葬し墓碑が立てられていたが、キリストン禁教令が発布され弾圧が激しくなった頃に墓碑を土中に埋めたのではないかと推測する。

織田信長の入京後、飯盛城の廃城とともに田原城の役目も終わったことから、この田原レイマンが田原城最後の城主であると考えられる。

また従来、確認されているキリストン墓碑のうち最古のものは、昭和8年に八尾市西郷墓地で発見された『I H S 天正十壬午年五月二十六日 満所 マイティオ』であったが、今回のキリストン墓碑が『天正九年』銘であることから、現在国内で確認されているキリストン墓碑の中で最古のものである。全国で天正期のキリストン墓碑はこの2点のみである。

以上、このキリストン墓碑については、発掘調査による考古資料とルイス・フロイスの書簡など文献史料に登場する人物（被葬者）とが一致する数少ない事例として大変貴重なものであり、日本キリストン研究においても重要な歴史資料であるとの理由から、平成19年（2007）1月19日に大阪府指定有形文化財（歴史資料）に指定された。

（村上 始）

引用参考文献

- ・村上直次郎 訳 『異国叢書』「耶蘇會士日本通信」下巻 駿南社 昭和3年3月20日
- ・東京大学史料編纂所『史料綜覧』巻11 安土時代之二 印刷局朝陽会 1944
- ・ルイス・デ・グスマン『グスマン東方伝道史』下巻 新井トシ訳 養徳社 1945
- ・松田毅一 『近畿キリストン史話』中央出版社 昭和24年6月5日
- ・松田毅一 『河内キリストンの研究』八尾市立公民館内郷土史料刊行会 昭和32年6月1日
- ・キリストン文化研究会編 『イエズス会本部所蔵日本人キリストン書簡』「キリストン研究 第6輯」昭和36年5月15日
- ・松田毅一 『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』風間書房 昭和42年1月15日
- ・村上直次郎 訳 『新異国叢書』「イエズス会日本年報」上 雄松堂出版 昭和44年5月20日
- ・村上直次郎 訳 『新異国叢書』「イエズス会日本年報」下 雄松堂出版 昭和44年11月30日
- ・竹村覚 『キリスト教遺物』「新版考古学講座」第8巻 特論＜上＞ 雄山閣出版株式会社 昭和46年5月10日
- ・奈良県立橿原考古学研究所編 『奈良県宇陀郡橿原町大王山遺跡』橿原町教育委員会 1977年9月
- ・奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和55年度 1981年3月
- ・松田毅一 『キリストン時代を歩く』中央公論社 昭和56年7月25日
- ・四條畷市教育委員会編集 『四條畷市史』第一巻 昭和59年9月1日改訂
- ・四條畷市教育委員会編集 『四條畷市史』第二巻 昭和54年3月1日
- ・国史大辞典編集委員会 『國史大辭典』 吉川弘文館 昭和54年3月1日

- ・財団法人京都府文化財調査研究センター 『大内城跡』 京都府遺跡調査報告書3 1984年3月31日
- ・大阪城天守閣 『大阪の古城と武将』 大阪城天守閣特別事業委員会 1984年10月10日
- ・堺市教育委員会 『堺市文化財調査報告書 第30集』 1986年3月
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第I期第1巻 同朋舎出版 1987年7月25日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第I期第2巻 同朋舎出版 1987年9月25日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第I期第3巻 同朋舎出版 1988年2月25日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第1巻 同朋舎 1997年11月20日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第2巻 同朋舎 1998年1月10日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第3巻 同朋舎 1998年4月10日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第4巻 同朋舎 1998年5月18日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第5巻 同朋舎出版 1992年12月15日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第6巻 同朋舎出版 1994年3月31日
- ・松田毅一 監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第II期第7巻 同朋舎出版 1991年12月10日
- ・松田毅一・川崎桃太 訳『フロイス日本史』3 中央公論社 昭和53年2月20日
- ・松田毅一・川崎桃太 訳『フロイス日本史』4 中央公論社 昭和53年4月20日
- ・飯田市教育委員会 『文永寺石室・五輪塔修理工事』 1987年3月31日
- ・磐田市教育委員会 『一の谷中世墳墓群』 1988年9月
- ・長江正一 『三好長慶』 吉川弘文館 平成元年5月1日
- ・津田秀夫 『図説 大阪府の歴史』 河出書房新社 1990年7月10日
- ・五野井隆史 『日本キリスト教史』 吉川弘文館 1990年9月1日
- ・八尾市立歴史民俗資料館 『動乱の河内』 八尾市立歴史民俗資料館 平成5年10月3日
- ・丸川義広 『近世京都のキリスト教』 「杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究」 1993年11月20日
- ・財団法人 大阪市文化財協会 『天満本願寺跡発掘調査報告書I』 1995年2月
- ・土岐市美濃陶磁歴史館 『特別展 堺衆のやきもの』 土岐市美濃陶磁歴史館 平成8年2月24日
- ・久米雅雄 『大坂城跡』 出土の円形印章について一或る吉利支丹大名の遺産―「立命館大学考古学論集I」立命館大学考古学論集刊行会 1997年12月24日
- ・吹田市立博物館 『高山右近とその時代』 吹田市立博物館 平成10年4月29日
- ・丸川義広 『キリスト教』 「第109回京都市考古資料館文化財講座資料」 平成10年5月23日
- ・久米雅雄 『「千提寺・下音羽の吉利支丹遺物」と崇拝の方式および信仰組織の復原』 「彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書」(財)大阪文化財調査研究センター 1999年3月31日
- ・石井進、服部英雄 『原城発掘—西海の王土から殉教の舞台へ』 (株)新人物往来社 2000年3月31日
- ・高槻市教育委員会 『高槻城キリスト教墓地』 平成13年3月15日
- ・大貫隆他 『岩波 キリスト教辞典』 岩波書店 2002年6月10日
- ・千代田区 東京駅八重洲北口遺跡調査会 『東京都千代田区 東京駅八重洲北口遺跡』 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003年7月18日
- ・長崎県南有馬町教育委員会 南有馬町文化財調査報告書第3集『原城跡II』 2004年3月
- ・大石一久 『千々石ミゲルの墓石発見』 (株)長崎文献社 2005年4月6日
- ・長崎県南有馬町教育委員会 南有馬町文化財調査報告書第3集『原城跡III』 2006年3月
- ・遠藤周作 芸術新潮編集部編 『遠藤周作と歩く「長崎巡礼」』 2006年9月 (株)新潮社
- ・今谷明 『戦国 三好一族』 洋泉社 2007年4月21日
- ・九州考古学会 『キリスト教』 九州考古学会 夏季(大分)大会実行委員会 2007年7月21日
- ・長崎県考古学会 長崎県考古学会 2007年度大会『16・17世紀初頭におけるキリスト教の布教とキリスト教墓』 2008年1月19日
- ・久米雅雄『第VII章 茨木のキリスト教遺物と歴史』「新修 茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸」 2008年3月31日
- ・久米廣陵『第VII章4 京阪キリスト教墓碑の編年と歴史的環境の復元』「新修 茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸」 2008年3月31日
- ・南島原市教育委員会企画 大石一久編集 南島原市世界遺産地域調査報告書『日本キリスト教墓碑総覧』(株)長崎文献社 平成24(2012)年3月30日